

山古志の角突き闘牛大会

山古志は、伝統的な牛の力比べが今も行われている全国 9 か所のうちの 1 か所です。この長岡市南東部の山あいの田園地帯で始まったこの慣習は、約 1,000 年の歴史があると考えられており、山古志の村民が農作業と移動を牛に頼っていた時代にまで遡ります。雄牛同士の試合は、牛が作物の植え付けや収穫期に携わっていない時の娯楽として親しまれてきました。この娯楽は江戸時代（1603 年～1867 年）により組織化され、19 世紀後半から 20 世紀初期には特に人気がありました。2004 年の地震により地域に甚大な被害が発生したため、角突きは一時中断されましたが、山古志村民の努力と全国の闘牛コミュニティの支援により、この伝統を復活させることができました。

山古志では、牛が闘牛場で競争することを「角突き」と呼びますが、他の地域の人々は「闘牛」や「牛相撲」という呼び名を使います。国の重要無形民俗文化財に指定されています。

勝者も敗者もない

山古志の角突きが他の闘牛と違うのは、牛の怪我を防ぐ努力が払われていることです。山古志では、牛は主に農耕のための動物であり、馬が通れない険しい山道での畑仕事や荷物の運搬など、重要な仕事を担っていました。牛は飼い主の家で育てられ、家族の一員としてみなされました。もしも、牛が闘いで大怪我をすれば、働けなくなり、飼い主の生活に大きな影響を与えることになります。さらに、試合で勝者と敗者が明確になると、小さなコミュニティ内の村人の間に負の感情を生じさせる可能性があります。

こうした理由から、山古志ではどちらかの牛が怪我をする前に引き分けを宣言するのが風習となりました。闘牛場の「勢子」と呼ばれる試合の担い手は、それぞれの闘いを注意深く観察し、いつ牛を引き離すのが最適かを判断します。引き分けは、闘いのクライマックスに、双方の牛が個々の強さを誇示して観客を楽しませた後、または一方の牛が相手を圧倒するか傷つける可能性があると思われるときに宣言されます。

牛の角突き大会

山古志の角突きの伝統は、いくつかの点が相撲に似通っています。大会は 5 月から 11 月まで、月に 1～2 回週末に山古志闘牛場で開催されます。大会は 10～13 試合で構成され、若い牛同士の試合から始まり、その後より劇的な衝突が予想される強力で経験豊富な牛同士の試合へと続きます。

最初は、闘牛場が塩と酒で清められる儀式が行われ、勢子は主催者とともに輪になり、手打ちをしたり手を上げたりして大会の安全を祈願します。試合中、闘牛場では試合内容が発表され、牛に関する情報や試合の出来事に関する情熱的な解説の場内アナウンスがあります。最初の数試合は、

勢子がすぐに誘導したり引き離したりできるよう、鼻輪をロープで繋がれた牛の間で行われます。後の試合では、より自由に闘うために牛が解放されることもあります。引き分けが宣言されると、素早く牛の後ろ足にロープを掛けて離し、勢子は必要に応じて牛の間に入り込み、角を引き離します。

試合する雄牛

山古志角突き大会に出場する牛は 3 歳の春にデビューします。引退年齢は定められておらず、19 歳の牛も闘牛場に出ることもあります。伝統的には角突きに参加する牛は主に家畜でしたが、現在では角突きの専用牛として飼育されています。それぞれの牛には、相撲との類似性に合わせて、男らしく、ドラマチックな響きの名前が付けられています。飼い主の商売にちなんだ名前の場合もあります。現在、約 50 頭の牛が大会に参加しています。

山古志闘牛場

闘牛場は田んぼに囲まれた丘の上にあります。大会当日は長岡駅から闘牛場まで観客を乗せるバスが運行されますが、ほとんどの人は車で訪れます。闘牛場への道の片側にある低い壁には、江戸時代の挿絵や牛との生活、2004 年の地震後に牛を安全な場所へ空輸するシーンを描いた白黒写真など、山古志角突きの歴史を紹介する情報が展示されています。闘牛場の収容人数は約 1,500 人で、座席に置くための薄いクッションが用意されています。大会当日には、食べ物、飲み物、手芸品などを販売する屋台がいくつか出店しています。入場料は大人 2,500 円で、15 歳以下の子供は無料です。